

茂木敏充衆議院議員との対談
3. インターネット時代の教師と生徒
4. 教育の質の向上と学生の自立

開倫塾
塾長 林 明夫

林 : おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝の「開倫塾の時間」も前回、前々回に引き続きまして、衆議院議員で、外務副大臣、そして科学技術担当大臣をお務めになりました茂木敏充先生から教育についてのお話をお伺いしたいと思います。茂木先生、よろしくお願い致します。

茂木 : はい、よろしくお願い致します。おはようございます。

林 : 今、教育の中で一番大事なことの一つは教育の質の向上だと思うのですが、今日はそれについてお話を伺いしたいと思います。よろしくお願い致します。

茂木先生は、学校の先生についてどのようにお考えでしょうか。

茂木 : 山田洋次監督が制作された映画に、「学校」という作品がありました。確か西田敏行さんが主演で、夜間中学校の先生役をやられたと思うんですが、ある場面で同僚の先生を囲んで西田さんがこう言うんですよ。「あなたは、教師というものを型にはめて考えていないか。」「生徒を引き付けるのは、勉強の内容じゃなくて教師の人間の部分なんだよ。」と。私、先週もこの番組で、インターネットの時代になるともう知識だけじゃ駄目で、経験や知恵というものが大切だという話をしたわけですが、これはある意味西田さんの言葉につながるころもあるんじゃないかな。教師が生徒たちから見て魅力的であるということが極めて重要で、そのためにはやはり教師の資質そのものが問われ、そこに競争があるということが必要じゃないかなと思っています。

林 : 教師の資質や教育の質の向上について、茂木先生はどのようにお考えでしょうか。

茂木 : 例えば先々週お話ししたフィンランドでは、小学校の先生にも大学院修士号の取得が義務付けられるようになってきています。それから先生の競争という点で一つ例を挙げますと、私は、東大を出た後、ハーバード大の大学院に進んだのですが、最初の試験の時にびっくりしたことがあります。なぜかと言うと、英語で2時間ずっと解答を書き続けて、やっと終わり、くたくたになって帰ろうとすると、別な先生が入室してきて、何やら用紙を配り出したからなんです。たまらないな、また引き続きテストかと思ったらそうではなく、その授業を担当した先生を、今度は学生が採点するための用紙だったのです。用紙には授業が適切であったか、使用した教材はどうだったかななどのいろいろな項目があって、5段階で評価するんです。3以下ですと、

その先生は次の学期から学校に来られなくなります。

林 : 厳しいですね。

茂木 : 非常に厳しいですから、先生も熱心に授業に取り組みます。もちろん大学院レベルだから学生が教授を適切に評価できるという面もあります。しかし、どのレベルでも何らかの評価、競争というのは教師の側にも必要なんじゃないかと、私は思います。

林 : 先生の教育の質の向上、つまり Teacher Education のためにはどうしたら良いでしょうか。

茂木 : 教えやすいことを教え、採点しやすいことだけで生徒を評価しては駄目だと思います。フィンランドだけでなくスウェーデンもそうなんです。北欧では長期担任制をとっています。これは、総合性の学校、小・中が一貫となったような学校で、担任の先生がずっと同じなんです。ですから、ペーパー試験をしなくても、普段のやり取りの積み重ねで個々の生徒の能力がわかるんです。その子がどれくらい考える力を持っているかがわかるんです。

日本の場合は、担任の先生が毎年変わるので、子どもの能力の評価をペーパー試験でやっているんです。試験しやすい内容、例えば年号を問うなどの、あまり意味のないこと、ただ点数をつけやすいもので評価しているだけで、子どもの本当の能力を評価していないんじゃないかと私は思います。

私は常々、小中一貫教育や中高一貫教育の話をしています。初回の放送で「エデュコ」という言葉を使わせていただいたんですが、長い目で子ども達を見てその子どもが持っている潜在能力を「引き出す」ことが、本当の教育だと思っています。つまり、この子ども達にはどのような能力があり、それをどう引き出していったらいいんだろうと考える教育に変えていく必要がある。小中・中高一貫教育はそのための制度改革なんです。

林 : アメリカには、チャータースクールという制度があります。これについて茂木先生はどのようにお考えですか。

茂木 : これは、学校の自由度を増やすということなんです。日本は公立と私立という学校形態ですが、アメリカでは新しい形態として、第3セクターのようなところも小学校などを作れるというかたちになっています。「作った後は自由にやって下さい。ただし、一定期間に成果が上がらなかつたら廃校になりますよ。」ということになっています。単年度のカリキュラムが全部決まっていて、1年間のうちにこのような内容を指導しなさいというのではなく、もう少し長いスパンで、「学校が自由度を持ってやって下さい。ただ最終的な成果についてはきちんと評価させてもらいます。」という制度をとっているのです。日本でも、それぞれの学校、それぞれの先生がもう少し自由度を持って子ども達を教えることが、これからは重要ではないかと思えますね。

林 : 学校の校長先生にも裁量権があった方が良いということですね。

茂木 : それぞれの学校の自由度の拡大ということで、もちろんそうですね。

林 : 最後になりましたが,大学教育と学生の自立というテーマについてお伺いしたいと思います。

茂木 : 大学教育で私が通った東大とハーバード大を比べて,どちらの学生のほうが勉強熱心だったかと言うと,明らかにハーバード大の学生のほうが熱心でした。では,アメリカ人は勉強が好きで日本人は嫌いかと言うと,そんなことじゃないんだと思います。一番の違いというのは,奨学金なんです。

林 : 奨学金ですか。

茂木 : 日本の学生は親の臍(すね)をかじって,親のお金で大学に行くのがほとんどです。高校時代は受験,受験で過ごしていますから,大学生になったら青春を謳歌しようと,テニスをやったりいろいろなサークルに入ったりするんです。一方,アメリカの学生は,奨学金をもらって,ローンを組んで自分のお金で大学へ行きます。大学で何を学ぶかによって社会に出てからの価値が変わってきますから,しっかり勉強しないと元がとれないという思いを持っています。この点,アメリカの学生の方が早く自立しているんじゃないかと思います。

林 : 社会人になってからの違いはどうか。

茂木 : 日本では,例えば「あなたのお仕事は?」と聞くと,「東京三菱銀行で働いています。」あるいは「ソニーに勤めています。」という答えが返ってきます。これに対して欧米人は,「私は金融関係の仕事をしています。」「システムエンジニアです。」などと,自分の職種について話すんですね。学校にしても,「東大生です。」「一橋大に行っています。」「足高に通っています。」ではなくて,自分は何の分野の勉強をしている,どのような目標を持って勉強をしているということの方が重要じゃないかと思います。どこで学窓かよりも何を学ぶかの方が大切です。さらに学ぶにあたっては,先生だけでなくいろいろな職種の社会人もその経験を持ち込んで教育の現場を作っていくことが,これからは大切になってくると思います。子ども達的能力を引き出す,つまり「エデュコ」のための力をみんなで,社会全体として膨らませていくことがこれからの教育では重要だと思っています。

林 : ありがとうございました。今回は3回シリーズの最後ですが,事衆議院議員の茂木敏充先生から貴重なお話をお伺い致しました。教育というのは英語の語源は「エデュコ」である。「エデュコ」とは引き出すという意味だということをお教えていただきました。私達一人ひとりがもっと子ども達の限りない可能性を引き出す努力をしていかなければなりませんね。茂木先生,ありがとうございました。

茂木 : 今回は3回シリーズで私の教育への思いを語らせていただきました。ありがとうございました。